133RD

京都大学書籍部学外書展

第133回京都大学書籍部学外書展

2024 6.8(土) ▶ 6.9(日)

11:00-18:30 | 11:00-17:00

※両日受付は30分前まで

堀川御池ギャラリー

書作品を鑑賞する

京都大学書道部　部長　植村亮

「これどういう意味なん？」、「何て書いてるん？」という質問は、書道をしているとよく聞かれる。このようなことを聞かれても書いている文字についてはある程度答えられるかもしれない。しかし、調和体作品は可能かもしれないがその漢詩の意味などは答えられない。創作作品であれば漢詩を調べる際に意味も見ており、多少は意味がわかる場合はあるかもしれないが、まして臨書作品ともなれば文字の意味など調べることはない。その文字を追っていくことが殆どである。そのため書いている内容に特段意味は持たない。意味によって何かを伝えたいということはおおよそないといえる。

では書作品は何を見ればいいのか。

まず作品全体を眺めてみてほしい。そうすると、ここには黒が多い、一方でこの箇所には白が多いというように黒と白の大まかな配置が見て取れる。その配置には均等に配置されているものから、非常に変化に富んだものまで様々である。

更には同時にその作品の印象を受け取れるだろう。かっこいいとか、かわいいとか、激しいとか、大人しいとか。それぞれの作品によってその印象は様々である。このように印象づける要因は、黒と白の配置の変化や、線の動きが主である。そして同じ作品であっても人によって抱く印象は異なる。その日の気分にしてある。

このように書作品を鑑賞する際、「なんか好き」「なんかかっこいい」「なんかかわいい」等といった素朴な感情・印象を大事にしてほしい。前述したように同じ作品でもその印象は鑑賞者やその日の気分でも変わってくる。好きな作品も変わるかもしれない。つまり書作品との出会いというのは一期一会なのである。だからこそ自身の中からわずかに湧き上がる素朴な感情・印象というものを大切に、作品達を御覧いただきたい。

最後にはなりますが、無事に開催できるのは、顧問の成田先生と田中先生、技術顧問の大原蒼龍先生をはじめとする多くの方々のご支援によるものであり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

そして、皆さま本日は第一三三回京都大学書道部学外書展初夏書展の作品を見に来てくださり、誠にありがとうございます。部員一人一人が思いを込めて書いた作品を、どうぞごゆっくりとご覧になってください。

白い物には文字を

成田健太郎（京都大学大学院文学研究科准教授）

中国・東晉の王献之（おうけんし）は、父の王羲之（おうぎし）と並び称される書の名人ですが、東晉の次の王朝である南朝宋の虞龢（ぐか）による「論書表」という文章には、次のような逸話が記されています。

王献之はまだ幼いころに、近所で塗りたての真っ白い壁を見つけ、そこにほうきと泥水を使って一丈（約2メートル）四方の大字を書きあげて、おおぜいの見物人を集めたといいます。そんな王献之は成人して書で有名になりましたが、あるとき一人の少年が、真っ白な衣に身を包んで来訪したところ、王献之はやおら筆を執って、その衣の至るところにくまなく文字を書きつけました。すると、王献之の従者たちがその書を少年から奪い取ろうと追い回し、衣は破れちぎれて、少年は片袖分の書しか得られなかったそうです。また、ある知人の家を訪れたときには、その息子がたまたま部屋で昼寝をしていたので、王献之はその白い寝間着にこっそり字を書いて立ち去り、やがて目覚めた少年を驚嘆させたそうです（二玄社『中国書論大系』第一巻・杉村邦彦訳を参照のうえ要約）。

王献之はどうやら幼いころから、そして大人になっても、白い物を目にすると文字を書きつけずにはいられない、そんな性分の持ち主であったようです。そしてこれらのエピソードからは、一心不乱に筆をふるう王献之のうれしげな表情さえ伝わってくるように思われます。己が身を駆使して、純白の平面に自分だけの造形を躍らせるその瞬間に、人は今も昔も言い知れぬ快さを噛みしめてきたのではないでしょうか。

今回の書展にも、そんな瞬間の一つ一つが集まっているのでしょう。

温故知新

大原蒼龍（技術顧問、日展会友　書家）

「故きを温ねて新しきを知る」このように国語の時間で習ったここと思いま す。吉川幸次郎先生（一九〇四～一九八〇、中国文学者、芸術院会員、文化功労 者、京都大学名誉教授）は、温故知新とは、故きを温めたずねて新しきを知る。 と解釈するのが良い。」「故き叡智ある歴史を、じっくりと器で温めるように深 く智徳を得る。そして、新しきものを創造していくのだ。」と話されていたそう です。

この「温める」という行為は「錬磨する」「鍛錬する」という事でもあると思 います。ゴツゴツとした原石を布でひたすらに磨き、宝石のような「玉」にする かのように。鍛え上げた「木鶏」のように。完全に自分のものになるまで、何万 回と繰り返す。しかも、一回一回を深く考え、新しい心を持ち続け、感性を研ぎ 澄ましてやり切っていく。倦まず弛まず。

此の様な精神をもって、一つ一つの物事に取り組んでいくことを若き時から やっておくべきです。その習慣や考え、精神は自身の面目となり、ＤＮＡに刻み 込まれていき、人生において大きな糧となるに違いありません。書においては、 職人になったつもりでひたすらに書き込むことでしょう。師・古谷蒼韻先生は、 「天才とは努力し得る才である。」「この〝努力し得る才〟というのが大事なの だ。」と繰り返し仰っていました。努力するまでは当たり前で、努力の方法を考 え、哲学し、工夫し続ける事だ。と、胸に刻まされました。

「書」という芸術に向かう事は、「温故知新」そのものと言えます。「温故」は まさしく古典との対峙です。歴史的流れと時代・人物などを理解し、臨書によっ てひたすらに其の古典の美と人物との対話を繰り返していく。大局的に、そし て微細に学び得ようとしなければなりません。臨書とは、己の書の美を創造す る為に、古典の美を肉体に宿していく行為だと思います。臨書は模倣で終わっ てはいけませんが、「気が付いたら普段の文字が、学んでいる古典の様になって いた。」となって、ようやく肉体に古典の美が入りだしたのだと思います。先ず は、踵を正し古典に対して頭を垂れて、古典の美という坩堝にドップリと浸か る。そうして、漸く自分のものになっていくのです。

「書」の勉強は汲めども尽きない深遠さと広大さがあります。普段の学書や 活動、または日常の事においても「温故知新」を深く考えて欲しいと思います。

作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) 形臨　文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) 意臨　形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) 背臨　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隷・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隷書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隷書を基盤として作られた書体です。一方で、かな・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々な作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によって書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

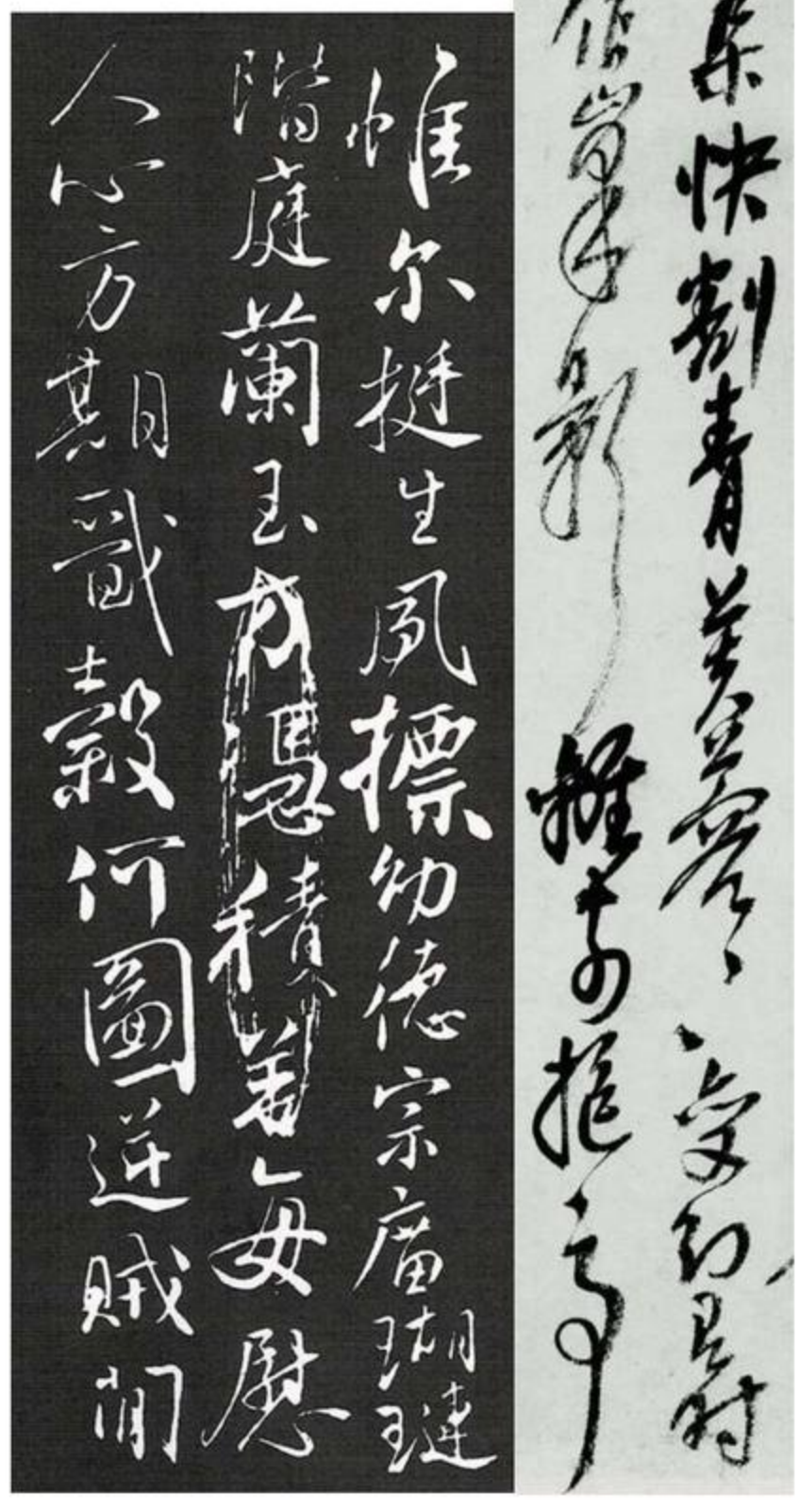


画像：九成宮禮泉銘（欧陽詢）

「行書」は一般的に隷書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像：蘭亭序（王羲之）



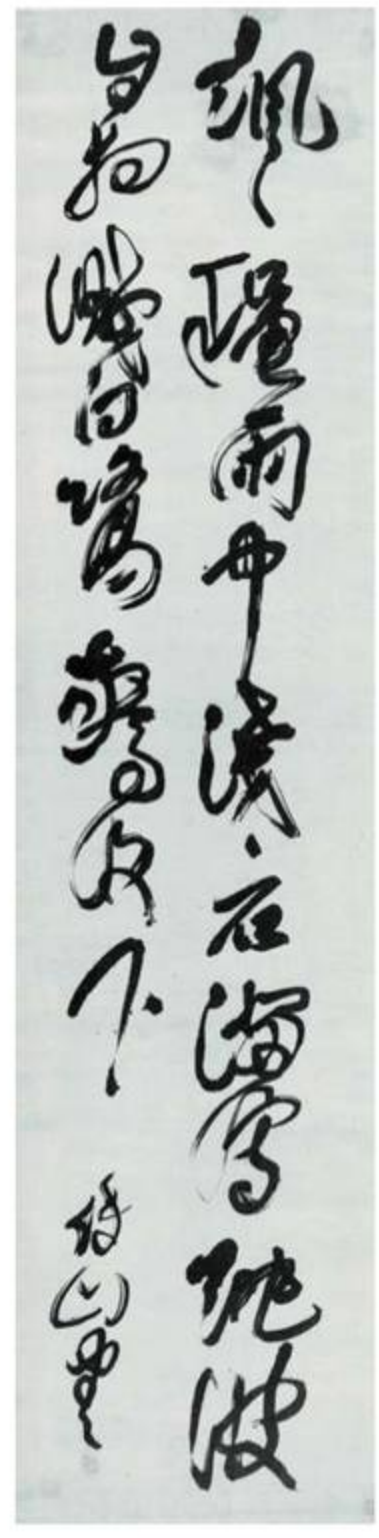
画像：詩稿（呉昌碩）

画像：祭姪文稿（顔真卿）

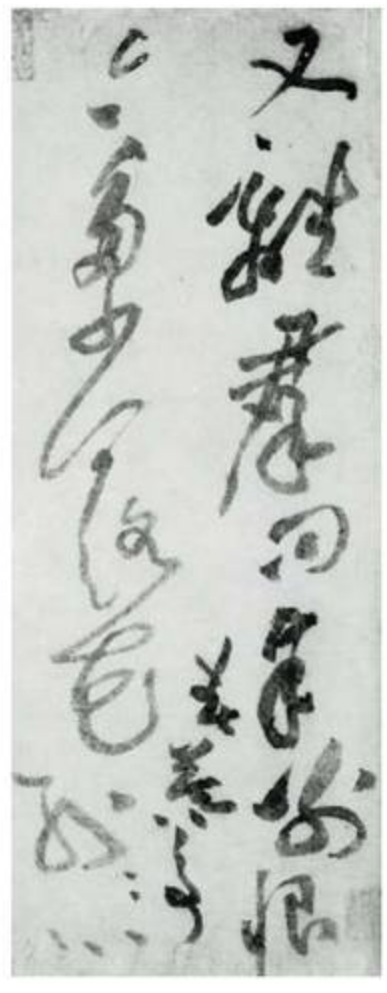
「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



画像：十七帖（王羲之）

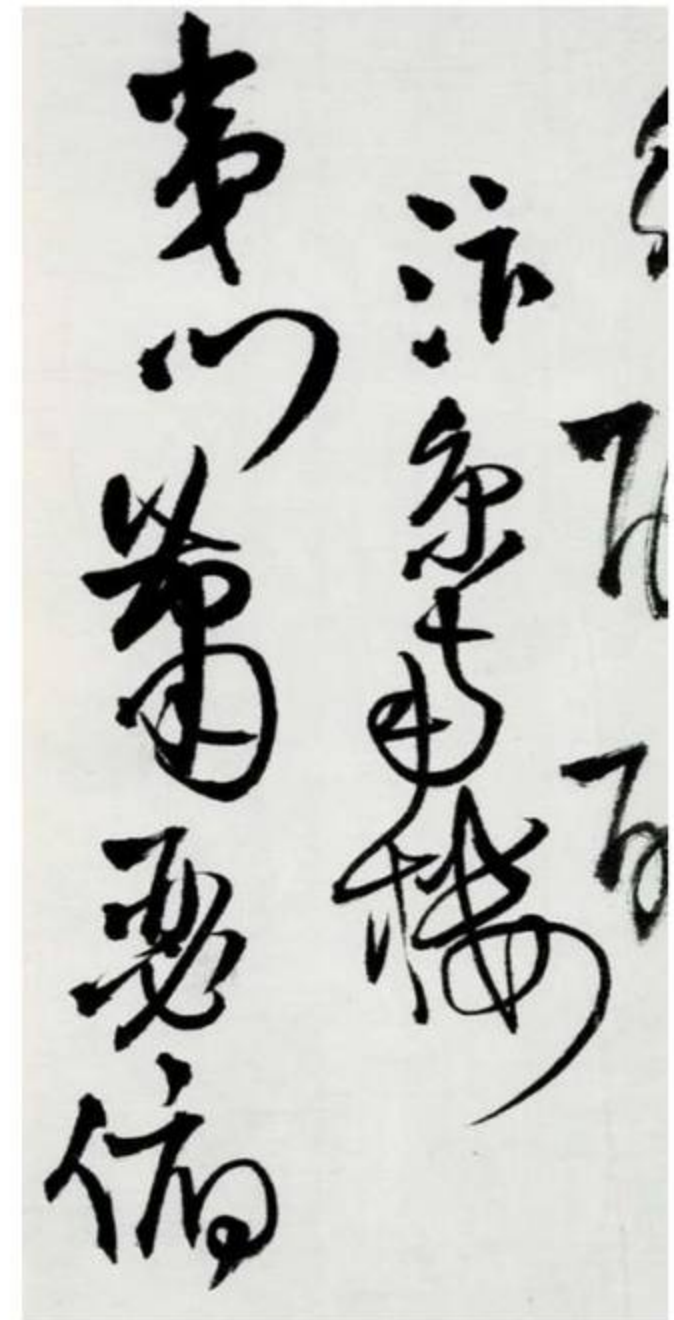


画像：五言絶句四屏（傅山）



画像：李太白憶旧遊詩巻（黄庭堅）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえますが、かえってそこに造形美と素朴な古籀の風味を併せ持った魅力を見出すことができます。



画像：草書七律五首巻（王鐸）

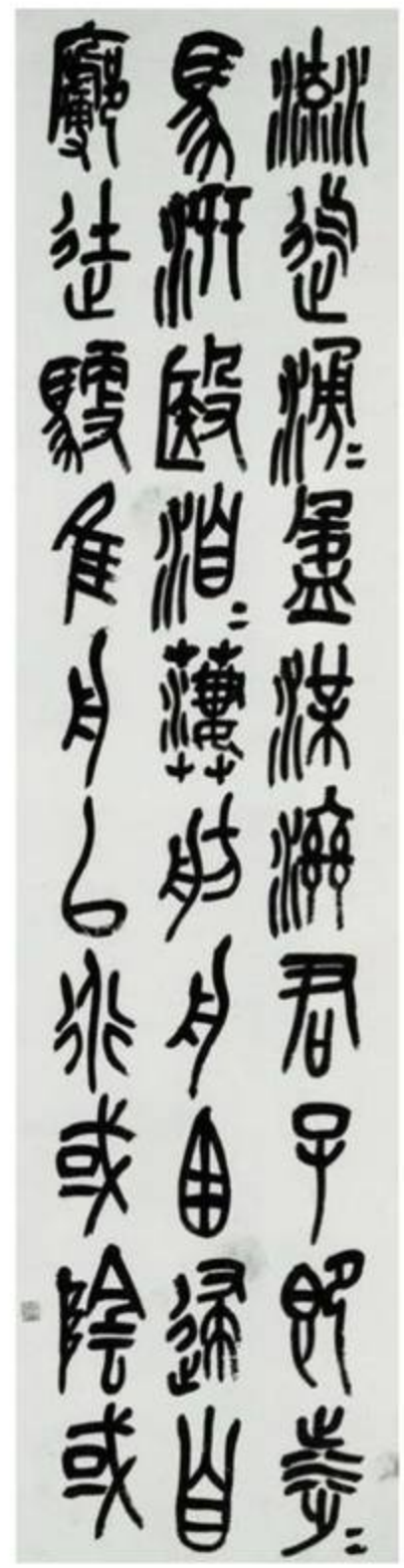


画像：曹全碑（筆者不明）

「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。



画像：石鼓文（筆者不明）

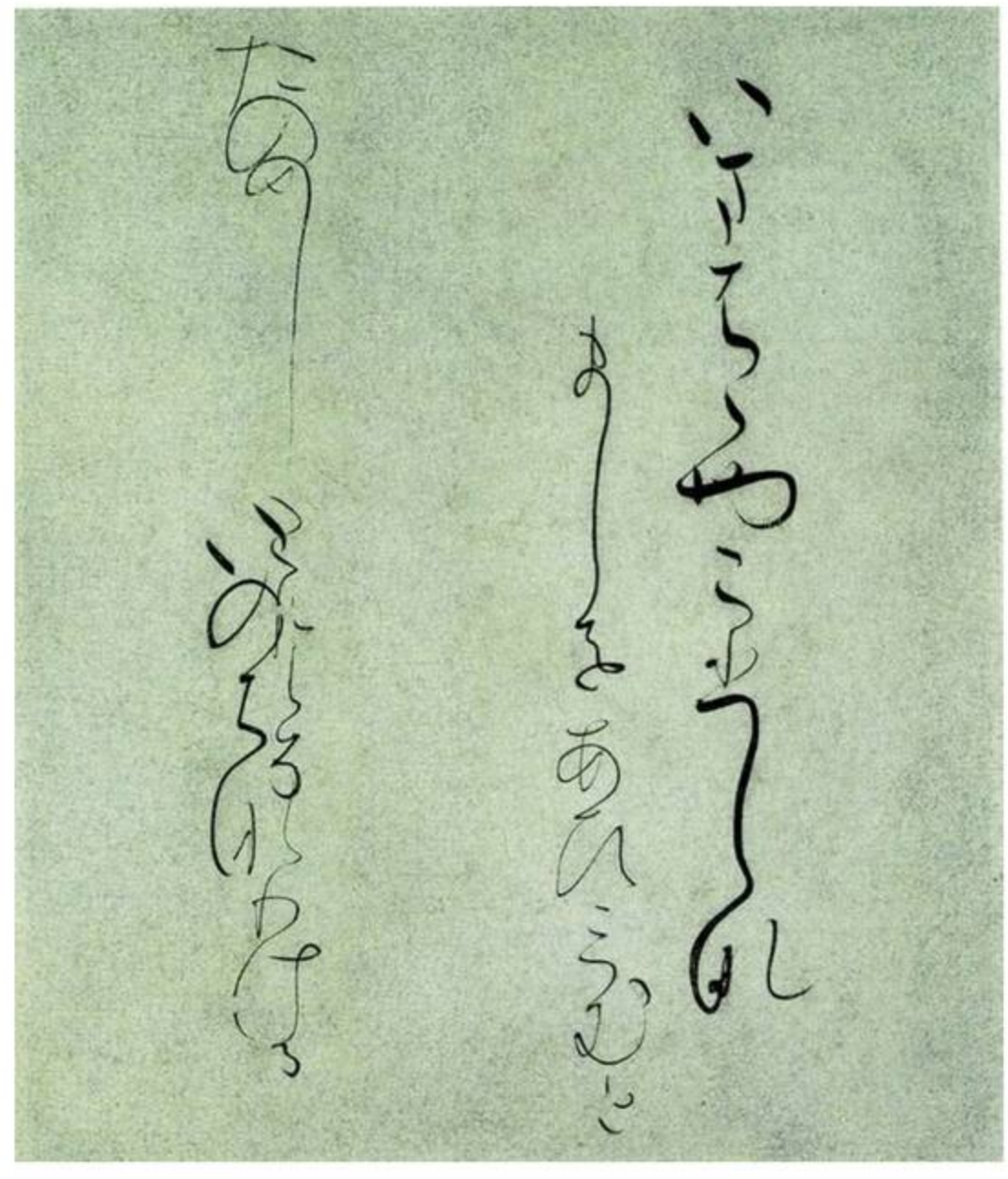


画像：臨石鼓文（呉昌碩）



画像：自書七言絶句十二屏（傅山）

「かな」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像：升色紙（伝行成）

「調和体」あるいは「近代詩文書」は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。

（著作権の関係上、画像の掲載は控えさせていただきます。）

作品一覧

賛助作品

大原蒼龍……創作・『龍飛鳳舞』……11

個人作品

二回生

岩﨑沙奈……臨書・『夏の到来』……26
臨書・『たなばた』……17
影山稜真……臨書・『后杞菊賦』……13
加藤杏次郎……臨書・『林散之臨張遷碑』……26
創作・『祝福』……26
創作・『印 2023～in 2023～』……18
川上雪乃……創作・『夏』……21
鈴木理仁……臨書・『祭姪文稿』……28
妹尾直弥……創作・『空舞』……14
創作・『エウレカ！（我、発見せり！）』……28
中野花音……臨書・『小篆千字文』……15
創作・『圖象銘』……29
松田陽南子……臨書・『地黄湯帖』……24
吉田慎二郎……創作・『元稹詩』……23
創作・『吉田印譜』……18

三回生

植村亮……臨書・金農『度量如海涵春育』……13
創作・『道』……26
齋藤亜紀……創作・『閼下贈裴舎人　一部』……14
永田はるな……臨書・王鐸『將入胙城留別之作』……15
中野葵……臨書・『蘭亭序（八柱第三本）』……29
松阪明日香……臨書・呉昌碩『五言律詩軸』……16
水嶋蒼来……臨書・『一条摂政集』……23
八木宣大……臨書・米芾『蜀素帖』……16
山田健太……創作・『散らまく惜しも』……30
創作・『帷蓋不棄』……23

四回生

青山尊……創作・『世に生を得るは事を成すにあり』……21
城本昌明……創作・『若葉』……21
須田光太郎……創作・『こいのぼり』……22
除本真理……創作・『ao』……30

五回生

飯田のぞみ……臨書・『曹全碑』……21
岡雅博……創作・『紅ほのか』……18
戸髙海……創作・『城崎にて より』……29

六回生

近藤毅……創作・『鄭審之詩』……27

修士一回生
素鴻……臨書・趙孟頫『赤壁賦全文』……22
創作・『靜心匾』……27
修士二回生
乾未樹……臨書・嵯峨天皇『光定戒牒』……12
研究生
宋暁萌……臨書・王羲之『蘭亭序』……28

合作

加藤杏次郎(二回生)、妹尾直弥(二回生)、中野花音(二回生)……創作・『大の大人』……19
加藤杏次郎(二回生)、妹尾直弥(二回生)、中野花音(二回生)、吉田慎二郎(二回生)……創作・『四千頭身』……32
加藤杏次郎(二回生)、吉田慎二郎(二回生)……創作・『ザ・松竹梅』……25
妹尾直弥(二回生)、樋口珠穂(二回生)……臨書・『顕楊聖教論』……32
妹尾直弥(二回生)、松田陽南子(二回生)……臨書・『草書千字文二種』……31
植村亮(三回生)、永田はるな(三回生)……臨書・智永『真草千字文』……31
山田健太(三回生)、素鴻(修士一回生)……創作・『下書嗢風涼白話』……25
木村隼翔(四回生)、城本昌明(四回生)、須田光太郎(四回生)……創作・『學遜志』……25
須田光太郎(四回生)、戸髙海(五回生)……創作・『透明少女』……31
乗杉玲壽(修士一回生)、乾未樹(修士二回生)……創作・『倣光明氏四葉』……17
新入生合作……創作・『若葉』……24
全体合作……創作・『書道部之有有木簡～しょどうぶのあるあるもっかん～』……19

作品紹介

賛助作品

技術顧問　大原蒼龍　先生
創作　『龍飛鳳舞』　半切

「龍飛鳳舞」
王羲之のごとく、当たり前の造形でありたい。
腹の底から湧き上がるような情念を紙面に落とし込みたかった。



ギャラリーA

1

乾未樹　修士二回生

臨書　行書　嵯峨天皇『光定戒牒』　二八

「…能三観仏乗、結三身於究竟、三種浄戒、開三因於初発。但光定宿因多幸、得遇勝縁、弃妄尋真、精祈戒品。庶使無上仏種、…」

2021年の初夏書展で書いた作品です。当時はコロナ禍の真っ只中でオンライン開催となり、以降実物をお見せする機会をなか掴めずにいました。しかしながら、今は対面活動も復活し、様々な新しい展開を迎えています。そのことを祝福しつつ、これまでに繋いできた活動の軌跡を忘れないという思いも込めて、この作品を示します。

作品としては、この古典の最大のチャームポイントである「光定」の字が映えるよう構図を決めています。三筆・嵯峨天皇の風格を少しでも感じていただければ幸いです。



2

植村亮　三回生

臨書　隷書　金農『度量如海涵春育』　二八

「度量如海涵春育應接如深水行雲操存如青天白日威儀如円鳳……」

金農の隷書はかわいい



3

影山稜真　二回生

臨書　行書　『后杞菊賦』　二八

「天随生目言常食杞菊乃夏五月枝葉老硬気味苦渋猶食不因作賦以自廣予嘗疑之以為士不窮約可也至於飢餓」

ものすごく特徴的な字には見えないのに、ぱっと見れば蘇軾の字だなと分かるような蘇軾の雰囲気を再現できていたら嬉しいです。



4

齋藤亜紀　三回生

創作　行草　『閾下贈裴舎人　一部』　二八



「二月黄鸝飛上林春城紫禁暁陰陰長樂鐘聲花外盡龍池柳色雨中深陽和不散窮途恨■漢長懸棒日心」

初めての二八の創作です！この詩文には好きな漢字がたくさん入っているのでとても気に入っています。

5

妹尾直弥　二回生

創作　調和体　『空舞』　二八

「南方の空を舞う灯籠を僕は只凝視めている」

台湾旅楽しかったな。



6

永田はるな　三回生

臨書　行書　王鐸『將入脽城留別之作』　二八



「冷々黄塵起。勞々世事非。裘凋人漸老。日莫雁還飛。驛路逢枯草。吳山悵夕暉。商量緝道服。何岫共雅薇。將入脽城」

初挑戦王鐸です。筆の使い方がいい勉強になりました。墨量を多くし、迫力を持たせるのに苦労しました。迫力あってくれ…！

7

中野花音　二回生

臨書　篆書『小篆千字文』　二八

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張」

こんな文字数書くのを後悔しているかと聞かないでください。たいてい、書き終えた時にそこまでかかった時間や労力のことは忘れてしまうんです。まったく後悔はしていませんよ。楽しかったはずです。他の書体でもまだまだ千字書いていきたいものですね。

8

松阪明日香　三回生
臨書　行書　呉昌碩『五言律詩軸』　二八

「留影舊時月、未仙前度人。霜天干氣象、皇鶴鬥精神。研食我常道、偈云何處塵。横枝挂瓢處、一笑礙烏巾。谷梅仁兄」
呉昌碩の臨書です！気迫を込めて！！



9

八木宣大　三回生
臨書　行書　米芾『蜀素帖』　二八

「青松勁挺姿霄駐屈盤種々出枝葉牽連上松端秋花■烟■■雲錦殷不羞不自立」
半年取り組んだ米芾臨書について何かの形で答えを出したくて、一番ポピュラーな蜀素帖を臨書しました。平面のなかに空間的なふくらみを持たせることを意識しました。

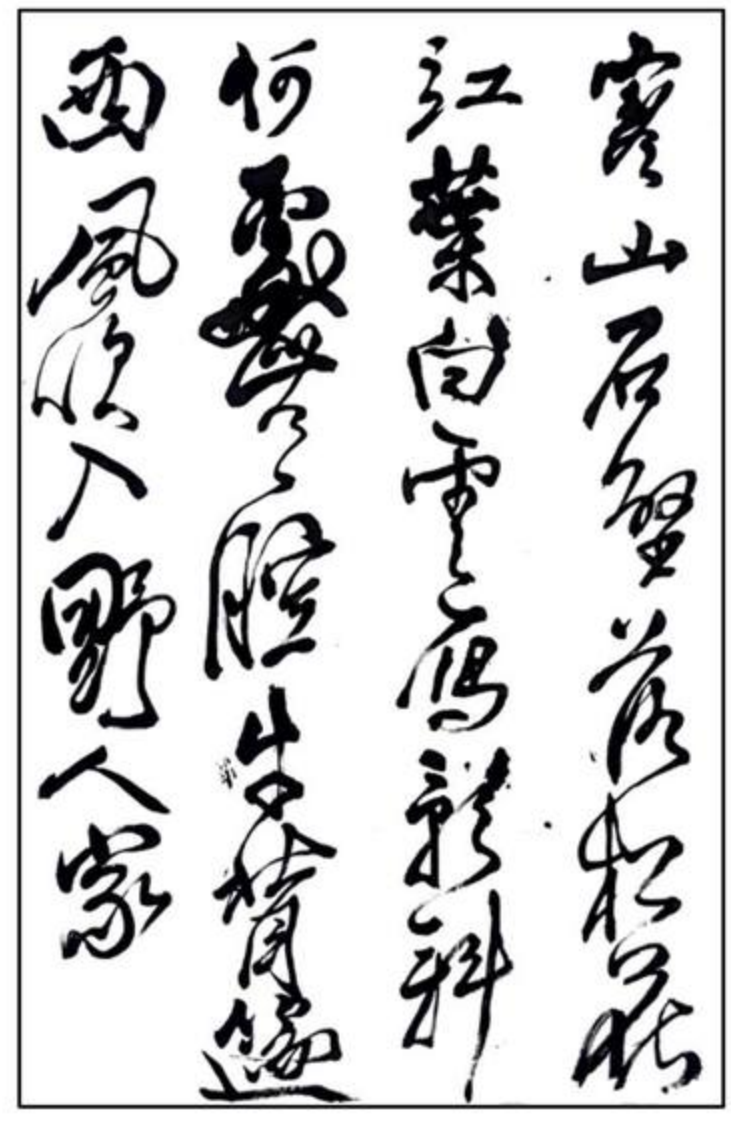


10

加藤杏次郎(二回生)、吉田慎二郎(二回生)
創作　草書、隷書、篆書　『ザ・松竹梅』　二八

「寒山石壁落松花，紅叶白云雁影斜……」

かつて「竹」という篆書創作合作を行いました。当時、その作品は書展には出しませんでした。ですが今回「松竹梅」へと進化し、完成させることができました。この上ない嬉しみ。

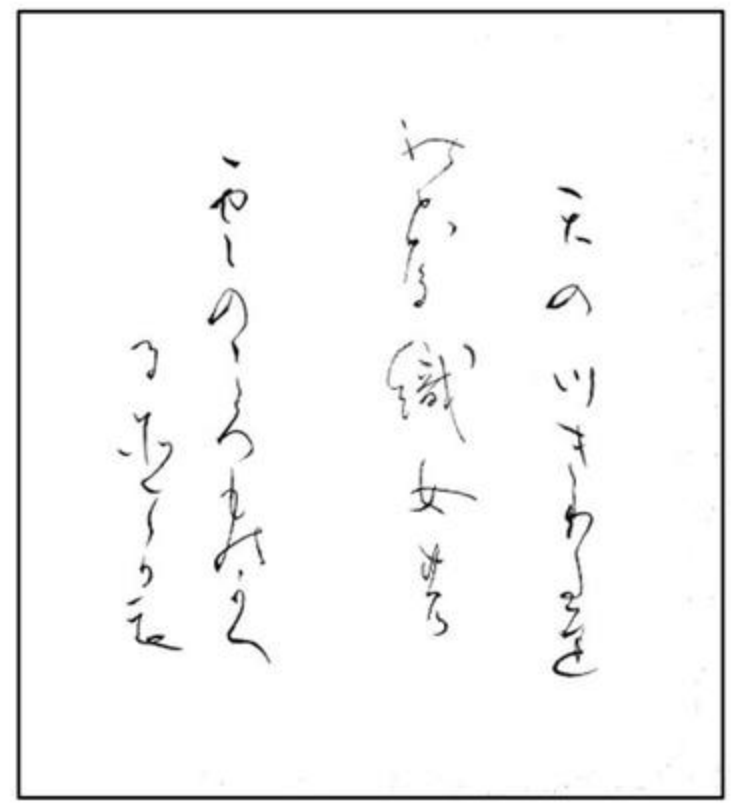


11

岩﨑沙奈　二回生
臨書　かな　『たなばた』　色紙

「天の川霧立ち上る織女（たなばた）の雲のかへる袖かも」

書道部で初仮名作品です。今回も季節を感じる作品になるように万葉集からえらびました。

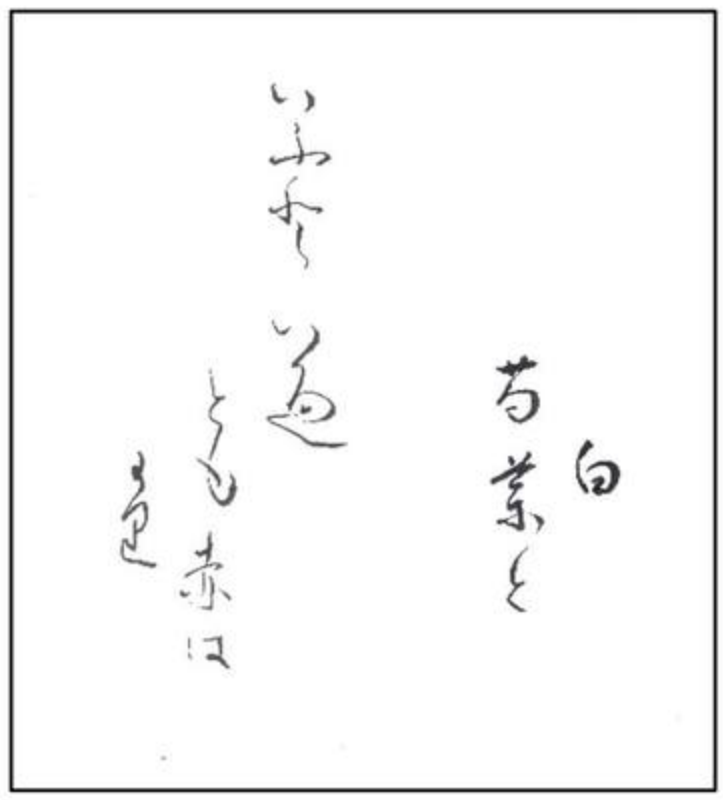


12　岡雅博　五回生
創作　かな　『紅ほのか』　色紙

「白芍といふとへども赤ばかり」

〝みなさんは「芍薬（シャクヤク）」という生薬をご存知でしょうか？芍薬には白芍薬と赤芍薬があり、効能に違いがあります。根の皮を剥いだものが白芍薬、根の皮がついたままのものが赤芍薬です。中国では明確に使い分けられているのですが、日本では（エキス製剤において）芍薬というと、赤芍薬が用いられています。つまり、中国では白芍薬だと処方にきさいがあるのに、日本では赤芍薬であることがあり得るという話です（日本国内の全ての漢方処方の芍薬が赤芍薬という訳ではありません）

つまり、高浜虚子の「白牡丹といふとへども紅ほのか」という句のように、「白だと言っていたのに赤が混じっているではないか」ということと同じことが言えると思うのです。〟



13　加藤杏次郎　二回生
創作　篆刻　『印 2023 ～in 2023～』　色紙

「百聞不如一見」

二〇二三年はどんな年でしたか？書道部に入ってからの約一年で掘った印を集めてみました。印にハマりすぎでびっくりしてしまいますな。



14　吉田慎二郎　二回生
創作　篆刻　『吉田印譜』　色紙

「欝蒸之氣　勇往邁進」

初めて本格的に篆刻作品を作りました。



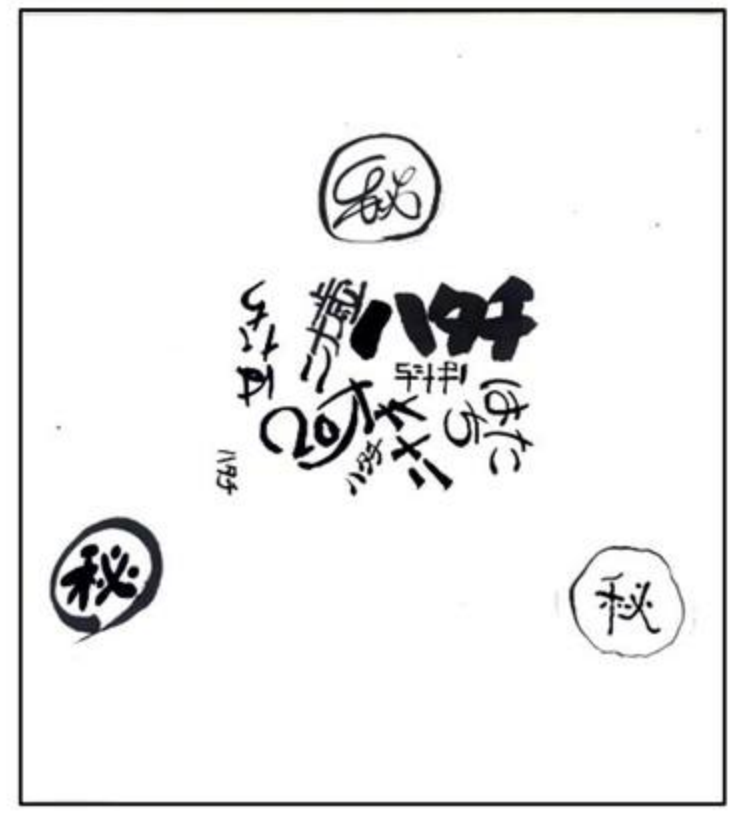
15

加藤杏次郎(二回生)、妹尾直弥(二回生)、中野花音(二回生)

創作　さまざま、フォントや楷書などなど、、　『大の大人』　はがき×4

「ハタチ　二十歳　はたち」

ミルクボーイズアンドガールの作品です。作品の内容はパンフレットではマル秘なので、実物をぜひ見てみてください。



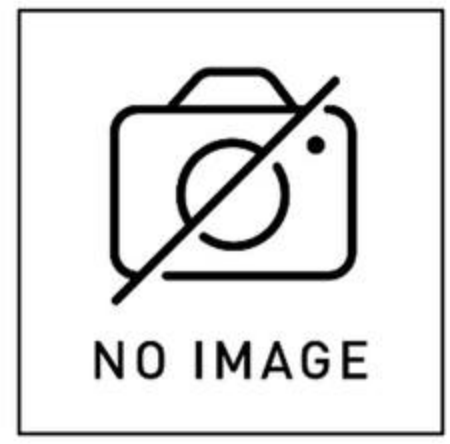
16

全体合作

創作　様々な書体

『書道部之有有木簡～しょどうぶのあるあるもっかん～』

令和六年時点での京都大学書道部の生活の様子が部員により記されている、大変貴重な木簡を本邦初展示いたします。専門家によると、当時の日常の一場面を正しく鮮明に描いている部分もあれば、潤色が入っておりとても史実とは考えられない部分もあり、当時の部員の意図が現れており、感性が伺い知れるという意味でも非常に興味深い木簡です。



ギャラリーB

17

青山尊　四回生
創作　楷書　『世に生を得るは事を成すにあり』　全紙

「世に生を得るは事を成すにあり」
誕生日が六月なので、生誕にまつわる好きな格言を買いてみました。初めての書展なので、とりあえず大きなのを書きたくて書きました。



18

飯田のぞみ　五回生
臨書　隷書　『曹全碑』　半切

「輔王室世宗廊土庁竟子孫遷」
「曹全碑」は中平２年（185）に刻された石碑です。後漢時代（25～220）の官吏で、武将として有能な曹全の功績を称えるために制作された作品です。完成までに苦労しました。



19

川上雪乃　二回生
創作　かな　『夏』　全壊紙

「春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」
一番好きな和歌に挑戦しました。風薫る初夏の爽やかさを表現することに苦労しましたが、その試行錯誤が楽しかったです。



20

城本昌明　四回生
創作　木簡　『若葉』　半切1/2

「緑陰自喜夏堂涼」
初夏の涼しげな風景を思い起こしつつ書きました。

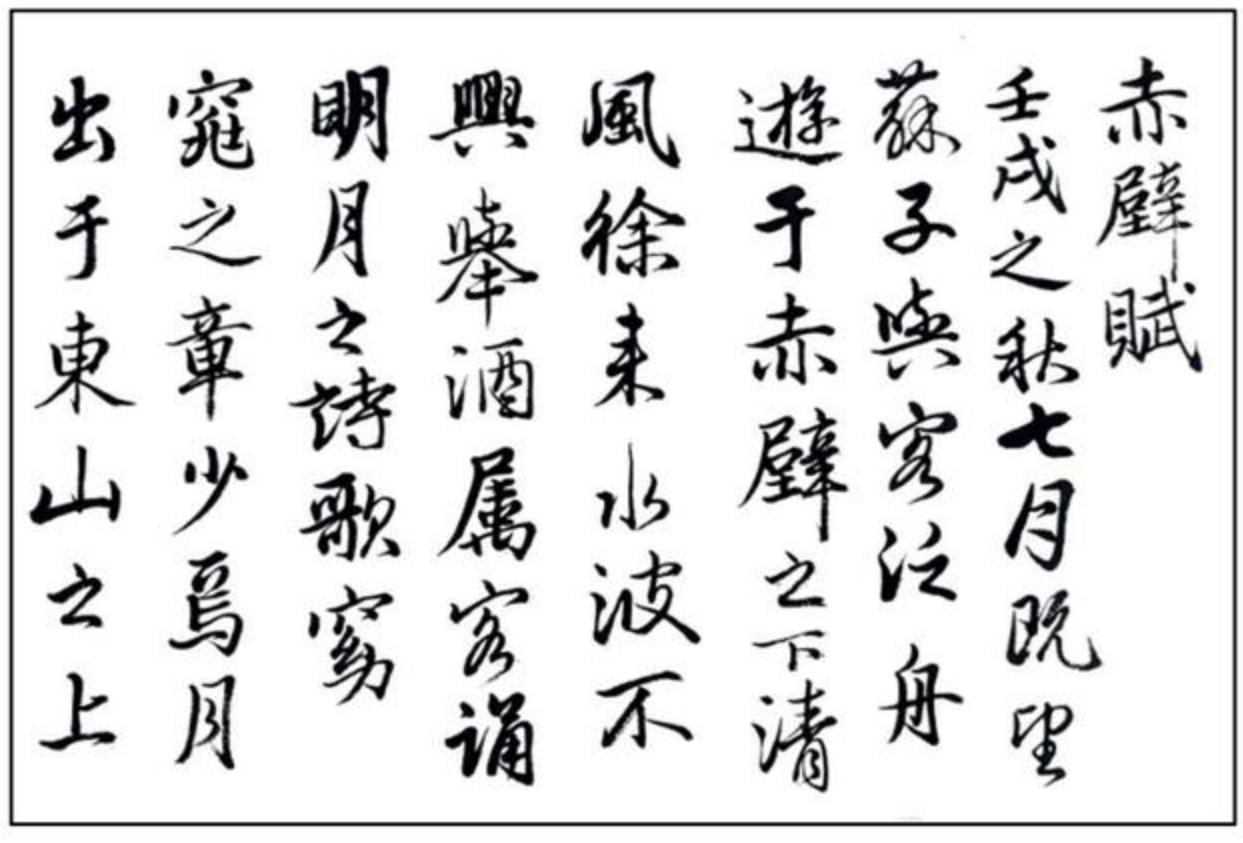


21

素鴻　修士一回生
臨書　行書　趙孟頫『赤壁賦全文』　巻子

「壬戌之秋，七月既望，蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。清風徐來，水波不興，擧酒屬客，誦明月之詩，歌窈窕之章。少焉，月出於東山之上，徘徊於斗牛之間，白露横江，水光接天；縱一葦之所如，凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虚御風，而不知其所止；飄飄乎如遺世獨立，羽化而登仙。（下略千字）」

初めての臨書作品で、故宮風の全臨を challenge してみた。かなり時間をかけて作った作品であったが、故宮で蘇軾の作品を見てすごくやる気が出たので、好きな趙書を臨書して長い巻子を作ってみた。ぜひその迫力を感じ取っていただければ幸いです。



22

須田光太郎　四回生
創作　調和体　『こいのぼり』　二八

「やねよりたかいこいのぼり
おもしろそうにおよいでる」

自分の書道の一つの到達点かな、と思っています。

親に感謝。

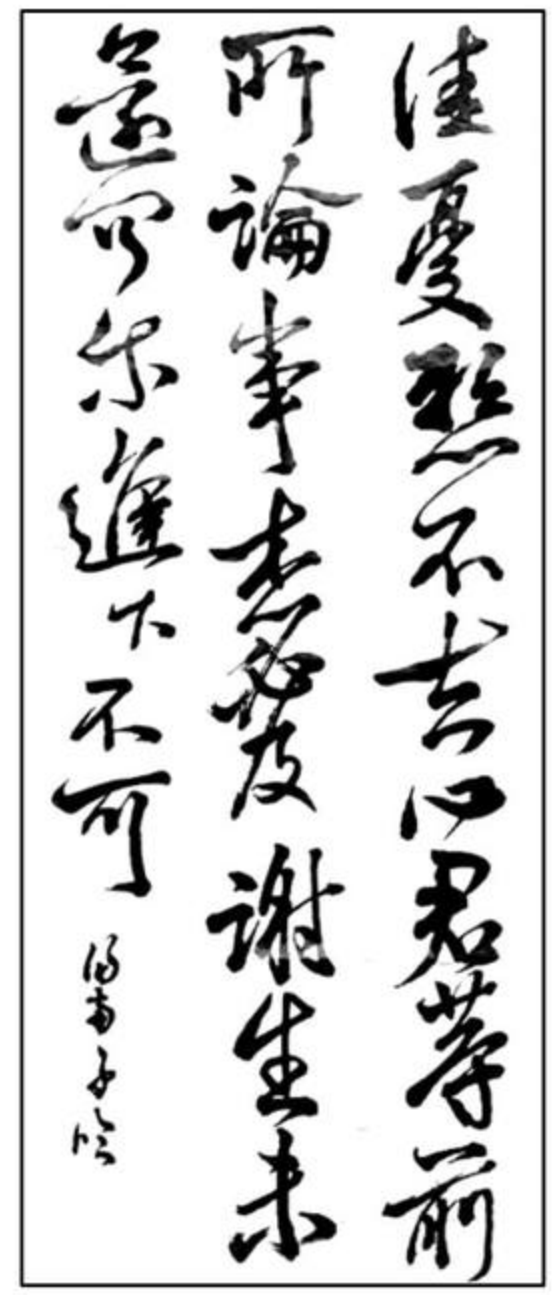


2/3

横

23

松田陽南子　二回生
臨書　草書　『地黄湯帖』　二・六×六

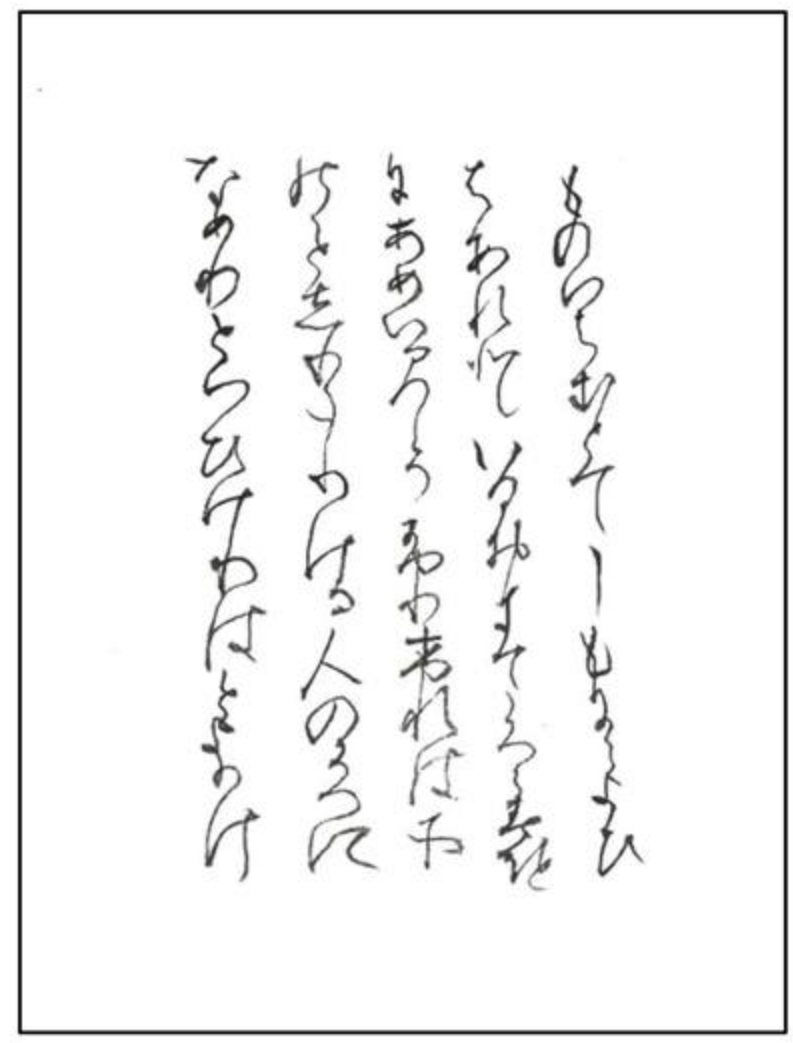


「(尚未)佳。憂懸不去心。君等前所論事。想必及。謝生未還。何尓。進退不可(解。)」

全紙幅に三行だとかなり字が大きくなりますね。楽しかったです。びしっと決まったぶれない線を書けるように頑張りました。

24

水嶋蒼来　三回生
臨書　かな　『一条摂政集』　半切



「おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかゝりけるとき、女のもとにいひやりける…」

初めて取り組んだ古典でしたが、楽しんで書くことができました。

25

山田健太　三回生
創作　篆刻　『帷蓋不棄』　半紙

「帷蓋不棄」

「だめになったものでも、使い道があるため捨てるのを惜しむこと」という意味らしいです。ダメダメダラダラ人間でも何かに役立てたらいいなあ。



26

吉田慎二郎　二回生

創作　楷書　『元稹詩』　全紙横

「殘燈寸焰明。竹風吹面冷、簷雪墜階聲。寡鶴連天叫、寒雛徹夜驚。秖應張侍御、潛會我心情。」

張猛龍碑に倣う楷書創作



27

加藤杏次郎(二回生)、妹尾直弥(二回生)、中野花音(二回生)、吉田慎二郎(二回生)、

創作　楷書　『四千頭身』　全紙横

「四千頭身」

一人千頭身計算です。



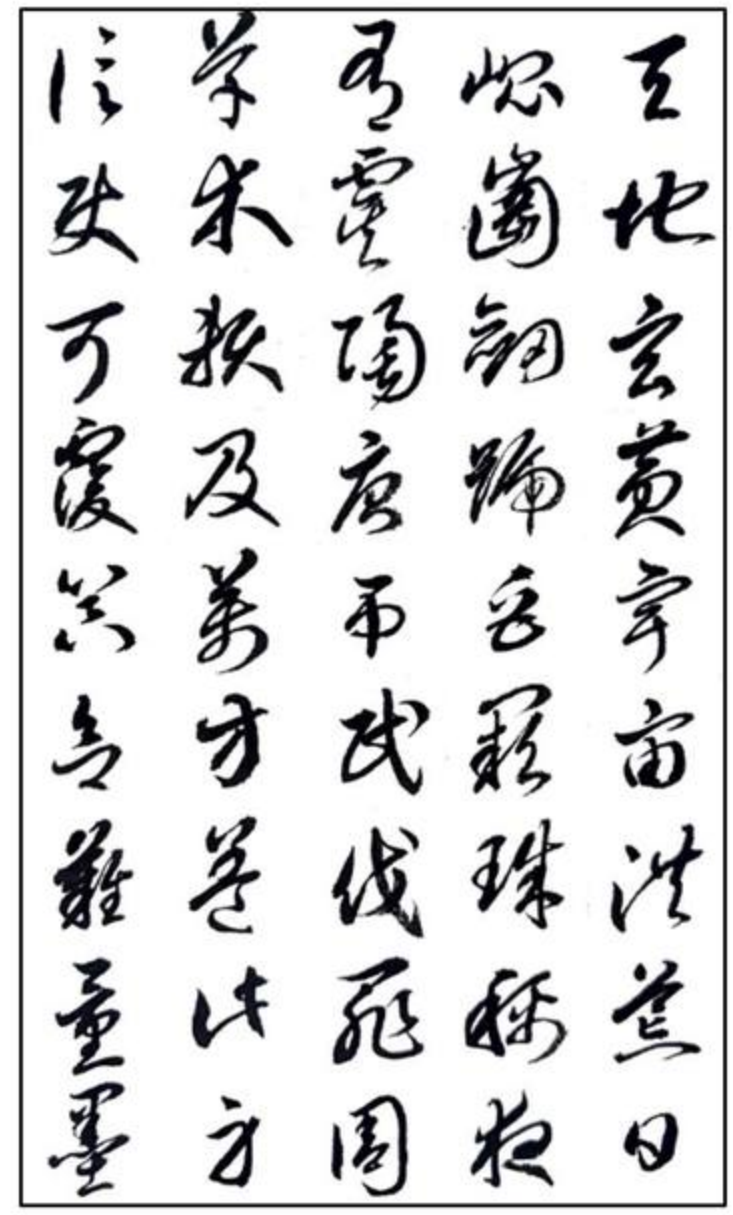
28

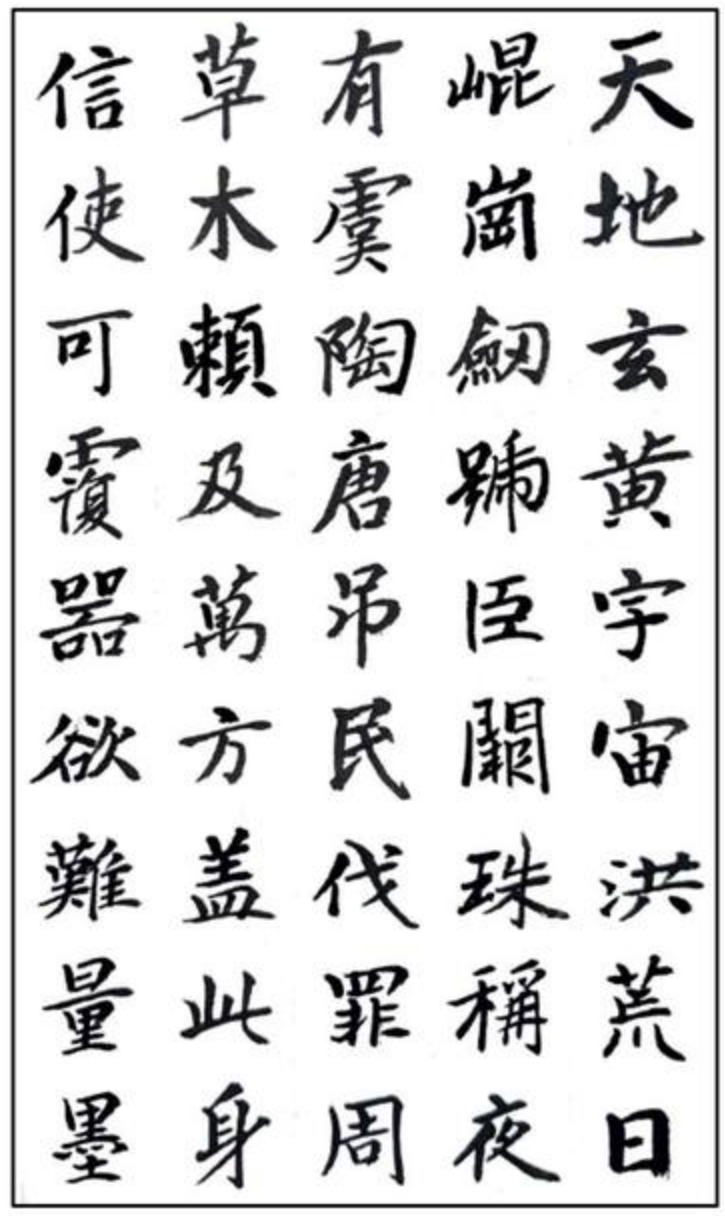
植村亮(三回生)、永田はるな(三回生)

臨書　楷書、草書　智永『真草千字文』　全紙二聯

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰…」

やりたかった真草千字文がやっとここさできました。しんどかったです。





29

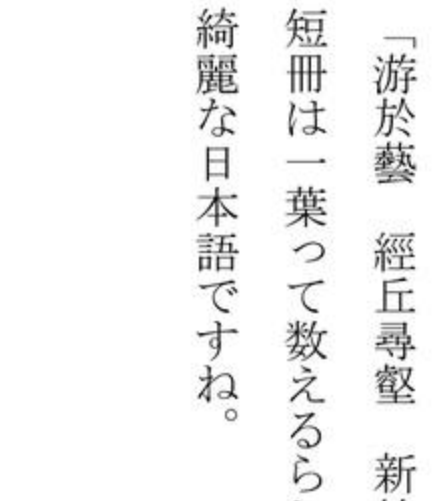
乗杉玲壽(修士一回生)、乾未樹(修士二回生)

創作　楷書、行書　『倣光明氏四葉』　短冊四聯

「游於藝　經丘尋壑　新竹氣清涼　書雅」

短冊は一葉って数えるらしいです。

綺麗な日本語ですね。



30

妹尾直弥(二回生)、松田陽南子(二回生)

臨書　草書　『草書千字文二種』　半切

「樓觀飛驚　圖寫禽獸　畫綵仙靈　丙舍傍啟　甲帳對楹　肆筵設席　鼓瑟吹笙　升階納陛」

行草合作のつもりで始めましたが、気付いたら草書合作になっていました第三弾です。二人の書家の千字文を一文字ずつ交互に臨書するという謎の試み。ちぐはぐさを出しながらうまくまとめるのに苦労しました。



ギャラリーC

31
岩﨑沙奈　二回生
臨書　かな　『夏の到来』　半切

「あしびきの山吹の花散りにけり井手のかはづは今や鳴くらむ」
春、短かったです。



32
植村亮　三回生
創作　行書　『道』　全紙　1/2

「道」
「道」って付いてると精神論が入ってくるよね



33
加藤杏次郎　二回生
創作　調和体　『祝福』　全紙

「目一杯の祝福を君に」
おめでたいですね。おめでたいですよ。おめでとうございます。夜遊び様の楽曲を題材にさせていただきました。祝福、素晴らしいです。

34
加藤杏次郎　二回生
臨書　隷書　『林散之臨張遷碑』　半切

「行披覽詩雅煥知其其祖高帝龍興有張…」
隷書にも向き合ってみたいと思い、書きました。大切だと感じました。真面目なコメントもできるのだと感心しています。



35

近藤毅　六回生

創作　行書　『鄭審之詩』　一・六×六横

「九重承渙汗　千里樹芳菲　陝塞餘陰薄　關河舊色微　發生和氣動　封植衆心歸　春露條應弱　秋霜果定肥」

米芾風創作を目指しました。呑気に書道楽しんでますがあと一年で医者になるの普通に信じられません。



36

素鴻　修士一回生

創作　行書、草書　『靜心匾』　半切1/4横

「澹泊明志寧靜致遠　靜」

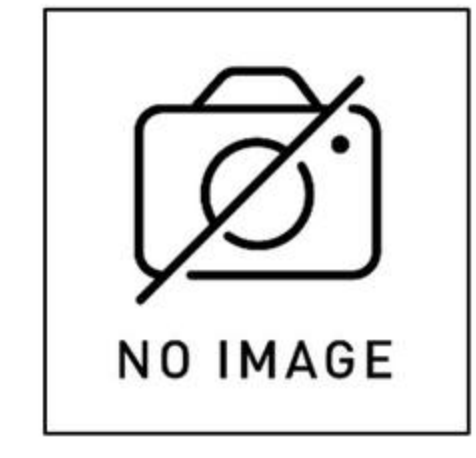
癸卯春逝、素鴻女離、軀體頻疾、志業匪彰、又自耽於花事、日亂月擾、桎形梏魂、無一日得靜、感古之文人常題字以自勵、而提筆書是匾額、題靜字而懸素鴻齋青雲間、常以自勉、又澹泊明志寧靜致遠者、此孔明勸勉其子之句也、為歷代嘉傳而不衰、遂襯於主字之側、以效昔士大夫之心境、以此悟道而成就、是作之成也、今雖閱春秋、其義猶存、而尚有加也、當遇事而懸心、輒思是書而視己額、不由感慨萬分、嘆世事之難而又能以再點奮鬥之志哉、乃感此時再展安時過歟、所以展之。甲辰穀雨素鴻自書是序



37

鈴木理仁　二回生
臨書　行書　『祭姪文稿』　全紙

「真卿以清酌庶羞祭于亡姪贈賛善大夫李明之霊…」
行書なんもわからん。



38

妹尾直弥　二回生
創作　調和体　『エウレカ！（我、発見せり！）』　全紙横

「薄桃色の川面を過ぎて、芽吹き始める青葉と夏のかほり　私は（心の行先）発見せり」
見つけた！

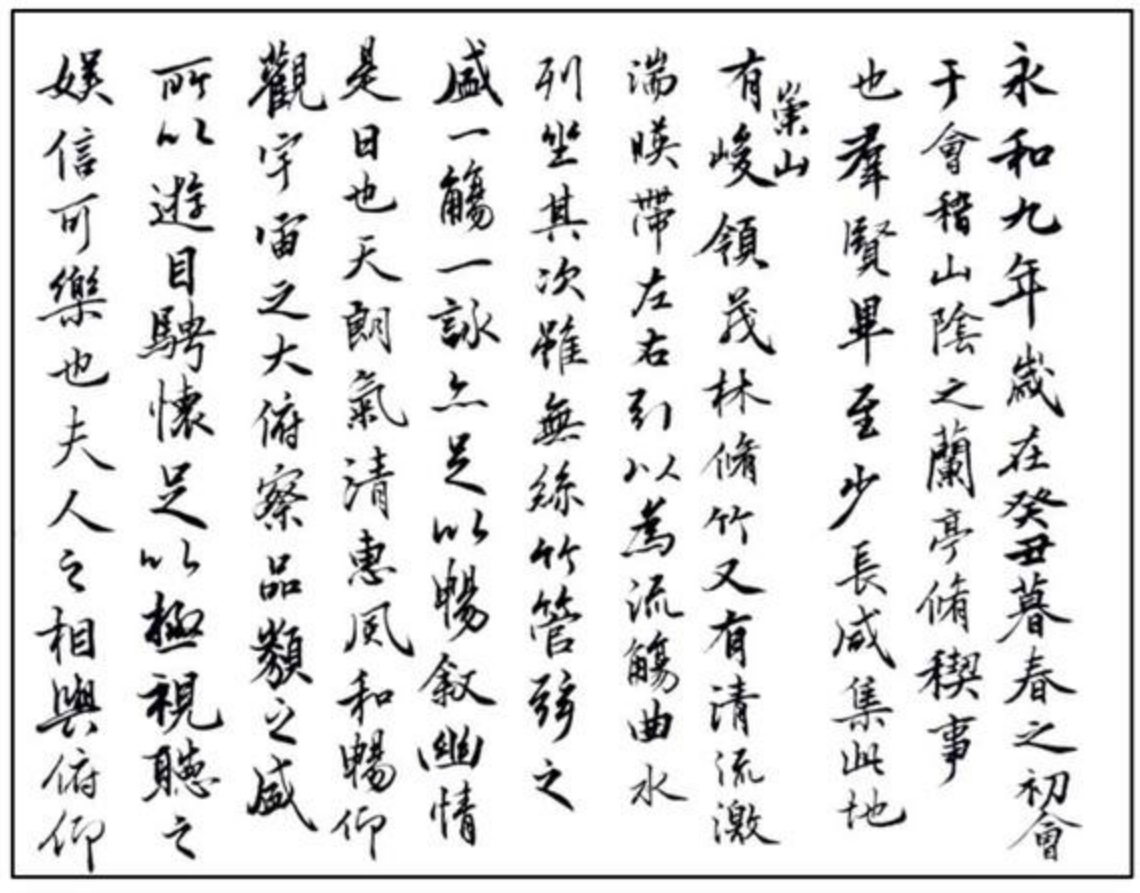


39

宋暁萌　研究生
臨書　行书　『蘭亭序』　35×125cm

「永和九年，歳在癸丑，暮春之初，會于會稽山陰之蘭亭，脩禊事也。群賢畢至，少長咸集。此地有崇山峻領，茂林脩竹；又有清流激湍，映帶左右，引以爲流觴曲水，列坐其次。雖無絲竹管弦之盛，一觴一詠，亦足以暢叙幽情…（下略）」

蘭亭序は私が人生で最も模写した字帖です。何度模写しても自分の実力不足を感じる、挑戦的な字帖です。



40

戸髙海　五回生
創作　調和体　『城崎にて　より』　二六

「生きている事と死んで了って（しまって）いる事と、それは両極ではなかった」

志賀直哉の「城崎にて」の一節です。城崎文芸館を訪れた際、この言葉が活字の立体で展示してありました。それを見たときに、言葉の展示でありながら、書道作品を見たときと同じような感動があり、この言葉を作品にしようと試みました。



41

中野葵　三回生
臨書　行書　『蘭亭序（八柱第三本）』　半切

「天朗氣清恵風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛」

三月に王羲之の故郷である中国の紹興へ行き、書聖故里や蘭亭を訪れました。作品は単にその余韻です。



42

中野花音　二回生
創作　篆書　『圖象銘』　全紙

「乙亥、■其易乍册■■■。用乍且癸■彝。才六月。隹王六祀羽日。〈圖象銘〉」

好きなものを好きな感じに作ってみました～。





43　除本真理　四回生
創作　近代詩　『ao』　四三横

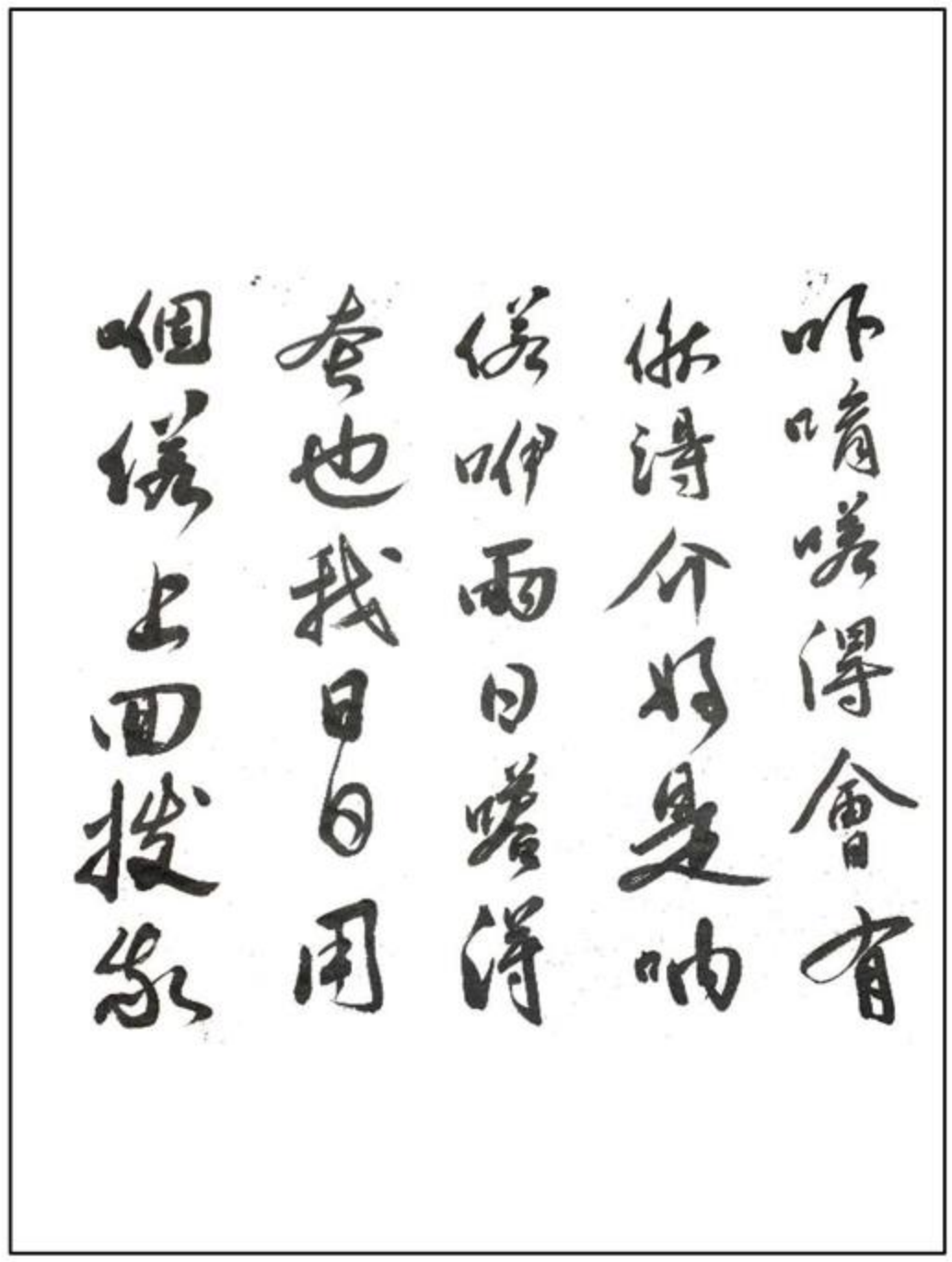
「共に描いた大海の夢よ碧空に」
初夏書展にちなみ、夏っぽさを取り入れスケールの大きい作品を目指した。



44　山田健太　三回生
創作　かな　『散らまく惜しも』　二六横

「風に散る花橘を袖に受けて君が御跡と偲ひつるかも　見渡せば向かひの野辺のなでしこの散らまく惜しも雨な降りそね」
作品を作っている時に散っていたのは桜ですが、橘、撫子が散ることに関する和歌を選びました。初めての大字がな作品です。もっと書道部でかなが流行ってほしいなと思います。

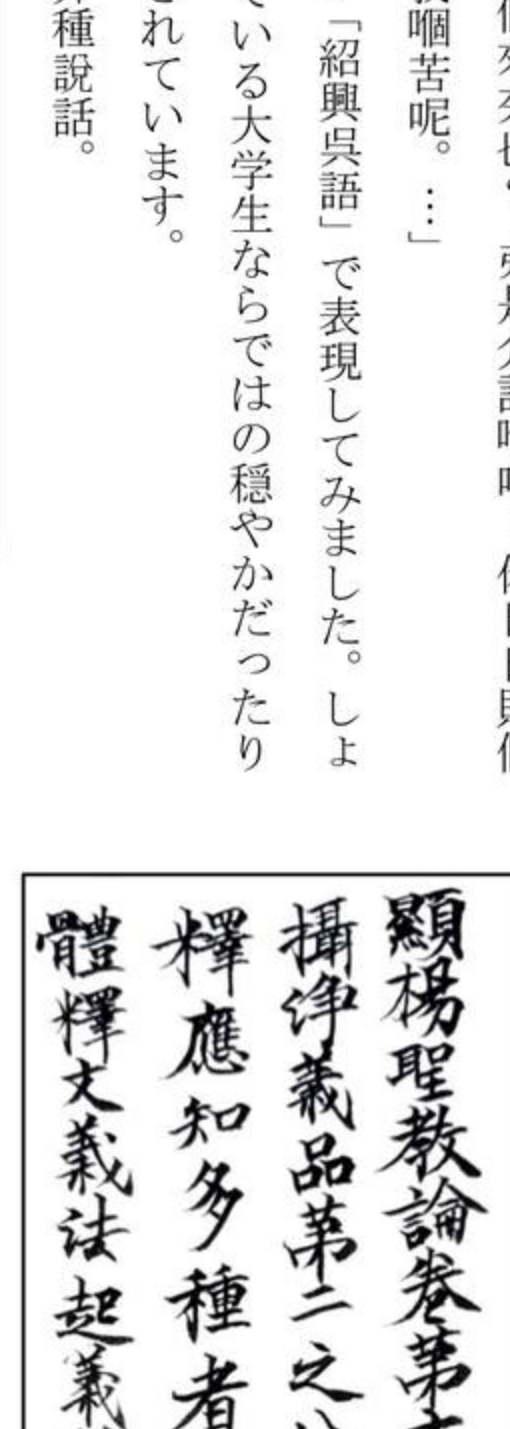
45
山田健太(三回生)、素鴻(修士一回生)
創作　行書　『下書嗰風涼白話』　巻子



「吓唷喏得會有候得介好　是吶！偌咿兩日喏得套也？　我日日用個偌上回撥我嗰個小忍小攻圖。是真當舒服哉！謝謝偌嗷！喀偌也總還好唧！　要死哉，是無有介苦法組喇！　介種事體嗰！喀偌弗是也有個來夯也？　弗是介話嗰唧…偌日日則個功夏果捻七捻八，扱進扱出，何裡曉得我嗰苦呢。…」

普段の二人の会話を、いつもの会話媒体「紹興呉語」で表現してみました。しょうもない会話の中には、淋漓に謳歌している大学生ならではの穏やかだったり穏やかじゃなかったりする青春が描出されています。
伢用紹興說話寫得段講做伢平常講白話介種說話。

46
妹尾直弥(二回生)、樋口珠穂(二回生)
臨書　楷書　『顯楊聖教論』　写経用紙



「顯楊聖教論第一二巻」

今年の正倉院は何が出るかなあ。

47
木村隼翔(四回生)、城本昌明(四回生)、須田光太郎(四回生)
創作　行書　『學遜志』　半切2/3



「學遜志」

学びて志を遜る。それは一日にしてならず。ほな五回生しかないか。

48

須田光太郎(四回生)、戸髙海(五回生)

創作　調和体　『透明少女』　全紙

「赤いキセツ到来告げて　今俺の前にある　軋轢は加速して風景　記憶・妄想に変わる…」

「俺が思うに、例えばあれが……」

ナンバーガールの透明少女より。歌詞を一節で区切り、即興で交互に配置していき、構想を練りました。楽曲の持つ衝動性と完成度の両立を書道で再現することを図りました。



49

新入生合作

創作　様々な書体　『若葉』　全紙

新入生のフレッシュさを若葉が生い茂る新緑の木で表現しました。若葉には新入生がそれぞれイメージする夏の言葉が書かれています。

ILAS　Hui Cheuk Kiu

工　藤井　航平

総人　松岡　加純

農　松阪　明日香

大阪　水嶋　蒼来

工　宮原　康輔

立命館　八木　宣大

工　山田　勝永

医　山田　健太

文　リーイーウェイ

四回生

農　青山　尊

薬　淺雛　穂乃花

経済　浅山　桃佳

文　岡島　日菜子

医　木下　美優

文　木村　隼翔

医　小谷　大翼

文　城本　昌明

交換留学　Chou Jyun Man

文　須田　光太郎

ILAS　Todorescu Isadora

法　中西　結希乃

文　南出　祐希

工　山下　理子

薬　由里本　陽香

武庫女　除本　真理

交換留学　Li Tony

理　渡辺　紗英

五回生

兵医　岡　雅博

農　戸髙　海

六回生

医　釜田　弘一朗

医　近藤　毅

修士一回生

理　川久保　毅

理　倉橋　あい

理　凌　榆凱

理　乘杉　玲壽

教育　平田　奈々子

AA 研　緑川　茉歩

修士二回生

農　乾　未樹

工繊　Chen Yueh Chen

博士一回生

農　柴田　達哉

文　Jake Iannacone

博士二回生

理　吉田　凌祐

研究生

文　宋暁萌

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授　成田健太郎

京都大学附属図書館　図書館企画掛主任　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　大原蒼龍

一回生

農　生野　尊彦

法　石川　和樹

工　遠藤　祐吾

立命館　押野　衣吹

経済　越智　夢生

京女　桂木　結紅

薬　河合　真弥

法　川上　誉市

薬　近藤　咲耶

京女　坂本　菜摘

京女　坂本　莉子

文　櫻井　すみれ

京薬　品部　七菜佳

総人　新長　慎之助

法　高谷　翠

工　竹内　悠太

農　田嶋　将英

法　田中　碧

教育　坪内　萌絵

ダム女　洞井　美菜子

総人　永里　姫珈

工繊　奈良岡　諒亮

文　野村　百加

同志社　原田　明澄香

医　原田　和香

工　藤木　庸

工　福井　珠輝

法　星出　茉胡

文　柳田　陸

文　山口　優衣

工　林　思彤

二回生

文　池内　紗世

京女　岩﨑　沙奈

農　小川　絢加

農　奥川　ほのか

工　影山　稜真

工　加藤　杏次郎

法　亀井　歩武

京女　川上　雪乃

総人　木下　尚馬

理　喬　奕翔

京女　酒井　悠希

工　鈴木　理仁

農　妹尾　直弥

教育　Tapper Totti Tor

農　戸邊　晃平

立命館　中江　咲絵

同志社　中野　花音

総人　樋口　珠穂

同志社　星野　真帆

農　松田　陽南子

医　吉田　慎二郎

三回生

KUINEP　Zane Hiroshi Aoki

ILAS　Adele Seruais

総人　植村　亮

京薬　川﨑　麻衣

総人　齋藤　亜紀

文　永田　はるな

理　中野　葵

KUINEP　Maura Nafziger-White

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ https://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802

LINE 公式アカウント
お得なクーポン、SALE情報の配信！
道具の豆知識を共有！得すること間違いなし。
「友だち追加」で QRコードを選択！ 書道が楽しくなる！

文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 贊交
株式会社 贊交社
〒605-0992
京都市東山区鞘町通七条上ル下堀詰町 242
TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113
E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

墨筆硯紙 書道用品一式
京都 古梅園
〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL(075)231-1531
FAX(075)231-0272

京都二条 銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店
香雪軒
〒604-0912 京都市中京区二条通河原町東入ル
桶之口町474番地
営業時間 10:00-19:00（不定休）
Tel 075-231-1695
Mobile 090-3495-4060

京都・書道用具店
松楳園
一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。
取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具
京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://:www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

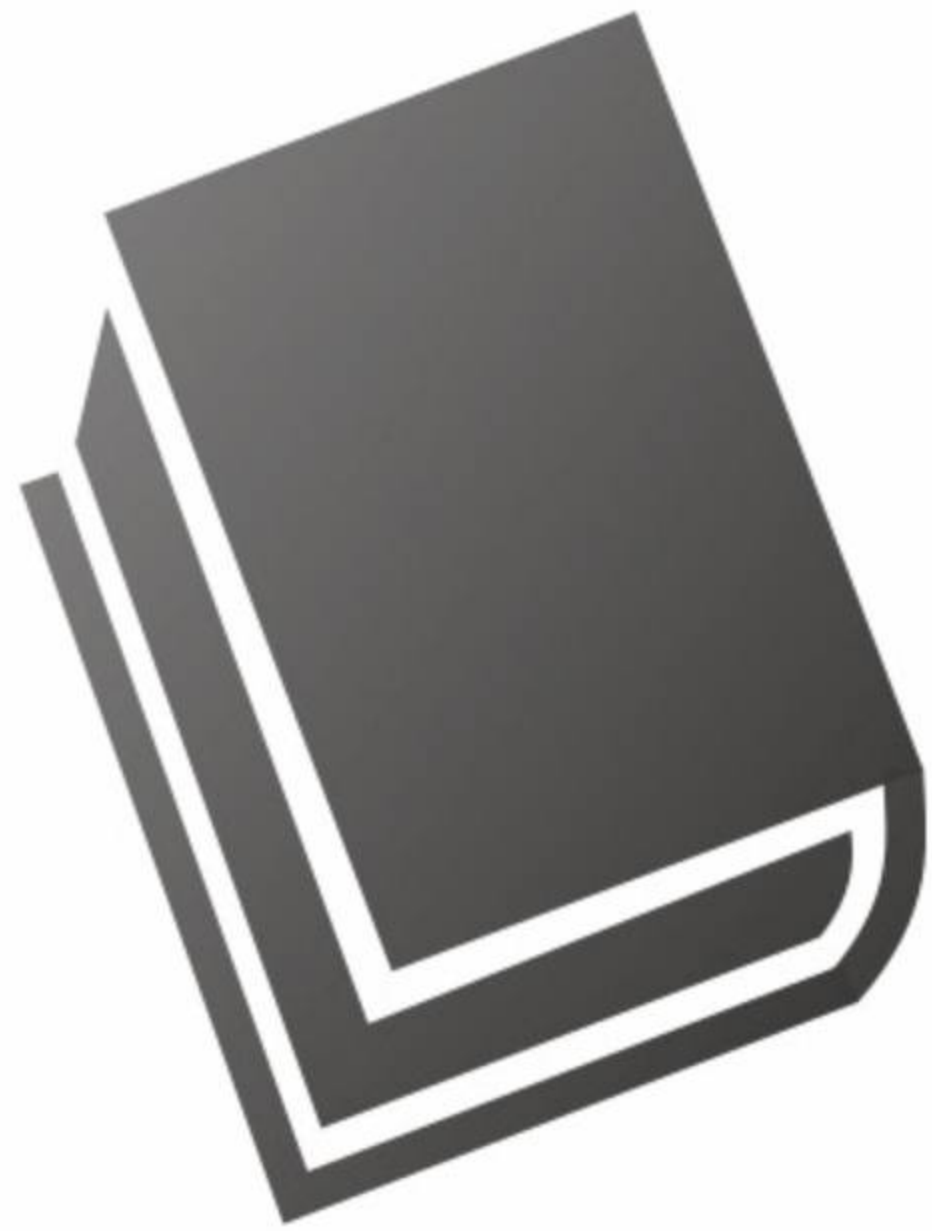
青緑堂山中表具店
〒604-8102
京都市中京区姉小路富小路西入ル菊屋町567
TEL：075-221-3381 FAX：075-252-1987
https://www.yamanaka-hyouguten.com

京筆・京文房
りゅうしどう
龍楮堂
〒604-0916 京都市中京区寺町二条上ル
TEL. 075-252-4120 FAX. 075-252-0006

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL(075)371-8186(代)
FAX(075)371-8189

本書展開催に際しご協賛を賜りました。

心よりお礼申し上げます。



This book was
made by the LeME